日本帝国陸軍機動第１旅団

黒いベレーと赤い片翼の鷲の紋章を身に着け、日本帝国陸軍の最精鋭部隊として知らない者の無い機動第１旅団の存在は第二次世界大戦が小康状態となった 1940 年代半ばにまで遡られる。

機動旅団はの嚆矢は第二次世界大戦における英国軍のＳＡＳやＳＢＳ、南部連合軍のコマンド部隊、さらには敵国である合衆国陸軍第１レンジャー連隊やドイツのブランデンブルク部隊といった少数精鋭の特殊任務部隊の活躍に範をとり、敵後方への潜入・撹乱を任務として陸軍空挺部隊からの志願者を中心に編成された第５０２中隊である。　当初は１個中隊であったが、第三次世界大戦中に規模が拡大されて第５０２中隊の人員を中心にして７５１中隊、７５２中隊が編成され、さらには各中隊をまとめる司令部として第８３５部隊が編成されて、北米総軍直轄部隊となり、敵中深く浸透し、後方撹乱を行うゲリラ・コマンド部隊として活躍した。第三次世界大戦終結後には「機動旅団」と改称されて、陸軍参謀本部直轄部隊となった。(※ 1)　1970 年代～ 80 年代には自由主義主義陣営諸国にも国家社会主義を理想の社会として標榜する団体が多く出現したが、それらの団体のほとんどはさほどの脅威でもない、謂わば子供のお遊び程度のものであった。しかし一部の団体は国家や社会に対するテロ行為に走り、さらには「敵の敵は味方」の論理からドイツによる援助を受けて重武装化していったことから、市民社会にとって重大な脅威となっていた。特に日本において猛威を振るったのは、ドイツの軍旗であるバルケン・クロイツを旗印として国内各所の日本軍基地や都市への攻撃を繰り返した「黒十字軍」である。(※ 2) 一般市民に紛れて一撃離脱ともいうべきテロ行為を繰り返す黒十字軍に対して一般の警察部隊や従来の野戦を前提とした陸軍や海軍陸戦隊の戦術による対処は非常に困難であり、それは敵地に於けるゲリラ･コマンド作戦を前提としていた機動旅団にとっても同様であった。　昭和 50 年に機動旅団司令官に就任した江戸川権八少将は、このような重武装の都市ゲリラによる攻撃にも効果的な対処を可能とするべく部隊編制や教育内容の改定を提唱した。さらに所属将兵を、やはり同様にドイツの支援を受けていたＩＲＡによるテロ行為に対して、効果的な対処を見せたイギリスのＳＡＳに研修生として派遣して、市街地における対テロ作戦の戦術を学ばせてもした。　江戸川少将によって抜本的な改革がなされた機動旅団は協力を取り付けた陸軍情報部や特別公安警察から黒十字軍に送り込まれた秘密諜報員の連絡などによって黒十字軍の情報を収集することに務めて、犯行予定現場に待ち伏せをかけ現れた黒十字軍を撃破するといった手段によってテロを未然に防止するだけでなく、アジトに対する強襲攻撃や軍の基地に対する工作員の排除、さらにはハイジャックや建物の占拠事件などにも多く出動して成果を挙げており、その結果、昭和 52 年の春頃には日本における黒十字軍はほぼ壊滅状態に陥いることになった。(※ 3)　その編成とは本来の陸軍の編成とは違う特異なもので、名称こそ旅団で司令官も少将が任じられているも、配下にある各連隊の兵力は中隊規模であり、さらに平時においては第１連隊、第３連隊はコア部隊として存在するのみであって完全充足にあるのは第２連隊の１個中隊のみである。しかし、その隊員は精鋭である第1挺進連隊(　空挺部隊) を中心に全陸軍から志願して厳しい選抜訓練を耐え抜いた正に精鋭中の精鋭によって編成されており、その訓練内容も隠密潜入や敵地でのサバイバル技術及びＣＱＢ訓練・さらには車両のみならず各種小型航空機や小型船舶の操縦技術すらも含まれた非常に高度なものであることから、総合的な戦力は非常に高く評価されている。　また潜入・離脱時における各種航空機による機動や航空支援の誘導のために、各中隊司令部には航空軍から派遣されたパイロット出身の将校が常に配属されていることが大きな特徴であり、海軍陸戦隊や空軍特殊部隊、同盟国からも交換研修生を受け入れている。

(※ 1)　北米戦線においては自分達の素性を秘匿するために「第５レンジャー連隊」という偽の部隊名を名乗ることが多く、名称を短縮して「５レンジャー」と呼ばれることが多かった。戦後に機動旅団と改称された後にも、「５レンジャー」は北米世代を中心に機動旅団のみならず各種の特

殊部隊を示す言葉として一般社会に定着している。

(※2)　国家社会主義を標榜するテロ組織の中でも最大級のものであり、70年代～80年代にはドイツから大規模な援助を受けていたが、それは単なる小火器や爆薬、車両といった物質面のみならず、元ブランデンブルク部隊の将兵によって工作員の養成や戦闘技術の訓練までもがなされていたという。　日本においても細胞として民間人のみならず、軍の参謀までをも取り込んでいたことがあった。エジプトや中近東の親日英諸国においても国家社会主義の細胞として猛威を振るっていたが、一部は内戦中の中国や、シベリア公国の支配が及んでいない東方ロシア地域、政情不安定なモンゴル地域にも潜伏しており、多民族国家であるシベリア公国の国籍を偽って来日していたとも考えられる。また60年代～80年代にかけて、シベリア公国においては共産主義を名乗る組織のテロ活動が相次いだが、その中には共産主義細胞に見せかけた黒十字軍による犯行であるものも含まれていると考えられる。　余談ではあるが後年、陸軍の協力の下に機動旅団と黒十字軍の戦いを描いた連続テレビドラマが製作された。特定の国家を一方的にに悪とみなすような描写はあまりにもプロパガンダ的であり、視聴者、特に情操が未熟な幼児に悪影響を与えるのではないかという声が陸軍内部からも上がったため、内容が大幅に見直されて、作戦に当たる機動旅団将兵は原色の特殊強化服を着た青年将校達に置き換えられ、そして黒十字軍もドイツの息のかかった犯罪集団や工作員ではなく、機械化兵士によって世界征服を目指す秘密結社として設定しなおされて、コミカルさも加えたＳＦスパイ・アクション調の作品として放送された。(※3)　機動旅団の隊員や陸軍情報部、さらには特別公安警察から黒十字軍に送り込まれた潜入工作員であるが、実際には姿を見破られて抹殺されることも多く、多くの殉職者を出している。

■歴代司令官

江戸川権八　陸軍少将　　昭和50年4月から昭和52年3月において司令官を務めた。趣味である料理はプロ並の腕前であり、退役後にスナックやパーラーの経営者となって近所の主婦を相手に臨時の料理教室を開くこともあった。

鯨井大助　陸軍少将　昭和52年4月から昭和52年12月における総司令官。しかし同年6月～11月の記録が抜け落ちており、さらには極秘裏にサイボーグ手術を施した超人兵士の実験を行っていたと噂されるなど、非常に謎の多い人物であった。後の昭和54年に倉間少将が就任するまでの約一年間、機動旅団の活動が全く公開されない時期が存在しているが、一説には鯨井少将の時代に表沙汰にできない問題が起こっていたのではないかと言われている。

倉間　　鉄山　陸軍少将　昭和54年4月～昭和55年3月嵐山　大三郎　陸軍少将　昭和56年4月～昭和57年4月伊吹　　唯　　陸軍少将　昭和60年4月～昭和61年4月姿　　三十朗　陸軍少将　昭和62年4月～昭和63年4月

■昭和50年5月における機動旅団の編成

機動第1旅団　旅団司令部　　第1連隊(基幹要員のみ)　　第2連隊　　第1中隊(基幹要員のみ)　　第2中隊(※1)　　中隊司令部　　海城　剛　　陸軍中佐　　中隊附航空将校　新命　明　　航空軍大尉(※2)　　第1小隊長　　大岩大太　　陸軍大尉(※3)　　第2小隊長　　松山リサ　　陸軍大尉　　第3小隊長　　明日香健二　陸軍中尉　　第3中隊(基幹要員のみ)

(※1)　　元々が非常に少人数の部隊であり、さらに現場の作戦においては各中隊長に大幅な権限があるため、連隊司令部は存在していない。

(※ 2)　本来は作戦のための輸送機の手配や航空支援の要請及び対地攻撃機誘導が任務であるが、新命大尉は回転翼機の操縦資格も有しており、自ら操縦桿を握って兵員の輸送・回収、さらには地上攻撃といった支援任務をこなすことが多かった。また陸上戦闘においても高い能力を発揮しており､実質的なサブリーダーとも言える存在であった。　(※ 3)　第 1 小隊長を務める大岩大尉は柔道を得意としており、機動旅団への配属前は陸軍第 6 師団の格闘技教官を務るほどの腕前を持っているが、本来は通信部隊の出身であり、その肉体派な外見とは裏腹に各種の通信機材の製作運用に長け、即製の通信手段の確保などといった分野において非常に高度な知識を有していた。なお、大岩大尉が第 6 師団に一時出向した際には副官の熊野大五郎中尉が第 1 小隊長を務めたが、熊野中尉は数ヵ月後にドイツの工作員との戦いで戦死したため、大岩大尉が第 1 小隊長に復帰した。　第 2 小隊長の松山大尉は陸軍工兵部隊出身である。一般的に工兵隊において将校は作業手順作成や検討、そのための機材の手配などを専門に教育され、下士官・兵は現場作業を中心に教育されることが多いと言われているが、松山大尉は珍しく爆破作業や爆発物の処理といった現場作業に関しても高い能力を発揮し、時限爆弾や設置された爆発物の迅速な無力化や、その場の材料による即製の爆弾を作るという知識と技術すら有していた。余談ではあるが第三次世界大戦以降、女性の軍への進出が大幅に高まったが、実戦部隊、特に精鋭とされる特殊部隊に配属されたのは松山大尉が最初である。現在において、陸軍機動旅団のみならず海軍特務陸戦隊や空軍特殊部隊ですら、女性将兵の姿を見ることは決して珍しいものではないが、そのきっかけとなったのは、松山大尉の活躍であると言っても過言ではない。　第 3 小隊長を務める明日香中尉は、陸軍士官学校を首席で卒業した期待の若手将校であり、その将来を期待されて配属された。当初は経験の少なさから危うい面も見られたが次第に歴戦の指揮官として成長していった。明日香中尉はその数年後の倉間少将の時代に某国の工作員との戦いで戦死したと言われているが、現在では戦死したのは当時機動第 2 連隊第 1 小隊長であり、彼によく似た白石謙作大尉であると言われている。